

『サーチライト』

——20世紀初頭シアトルの黒人週刊誌——

黒 川 勝 利

I

本稿の目的は、20世紀初頭にワシントン州のシアトルを中心に発行されていた黒人週刊誌『サーチライト』の記事を整理、紹介することである。

このような作業に従事するに至った経緯をまずはじめに述べておこう。

近年私はアメリカ労働運動と日系人労働者の関係について研究をすすめているが、その過程で、シアトル中央労働評議会の機関紙『シアトル・ユニオン・レコード』の1913年5月31日号の以下のような記事に出会った。

黒人向け新聞の『サーチライト』は、黒人は労働組合によって差別されてきた、それゆえ現在の論争において黒人は日本人を支持すべきであると提案している。これほど真実からかけはなれていることはない。たしかに色を理由とした黒人に対する偏見は存在する。しかしアメリカ労働総同盟は性別、信条、色による区別はしておらず、ここシアトル市に多くの黒人組合員がいることによって証明されているように、すべてのものを仲間として認めている。『サーチライト』の編集者は彼の眼鏡を拭いた方がよい⁽¹⁾。

それ以来私は、この『サーチライト』の主張を直接同紙にあたって確認したいと考えてきた。そして今年（1993年）の夏シアトルを訪ねた折に『サーチライト』が保存されていないかどうかを調査したところ、1919年5月3日

(第18巻17号)から1920年12月25日(第19巻52号)までの同紙がワシントン大学図書館にマイクロフィルムとして保存されているということを確認した⁽²⁾。

言うまでもなくこの中には、前述の1913年5月31号は含まれていなかった。しかしながら、この保存されていた1年半の記事の中にも、実のところ当初の私の失望を補ってあまりあるような多数の興味深い記事が含まれていた。その中には、1913年5月31日号と同様に日系人への連帯を表明した記事もあれば、黒人自体への差別に対して激しく抗議する記事もある。さらには、当時のシアトル、タコマやワシントン州で行われた選挙の際に、黒人はいかなる行動をとるべきかを読者に呼びかける記事も含まれている。そしてその一部は、アメリカ黒人史、労働史、あるいはアメリカにおける黒人と日系人との交流史を理解するための資料として整理し紹介しておく価値があるように私には思われたのである⁽³⁾。

II

『サーチライト』を通覧してまず印象に残るのは、やはり当時の合衆国における黒人差別に関する記事である。

周知のように第一次大戦期、それまで合衆国南部のプランテーション地帯に住んでいた黒人たちは、戦時ブームとヨーロッパからの移民の途絶による労働力不足に影響されて、北部の工業都市に向かって大規模な移動を開始した。このような移動は、しかしながら南部における黒人差別の解消に結びつくことなく、かえってその北部への拡大、全国化の契機となった。1919年7月にシカゴで発生した人種暴動がその象徴である⁽⁴⁾。

黒人新聞たる『サーチライト』がこのような状況を黙視できなかったのは当然である。

その種の記事もまたいくつかに分類することができる。黒人への無法なり

リンチとそれを放置する合衆国政府を批判する記事⁽⁵⁾、ヨーロッパから傷ついて帰還した黒人兵士に対する合衆国の病院における差別や虐待に抗議する記事⁽⁶⁾、シアトル市の採用人事における差別を批判する記事⁽⁷⁾、ヨーロッパでは黒人が差別されずむしろ歓迎されていると述べて間接的にアメリカの現状を批判する記事⁽⁸⁾、などである。そしてとりわけ印象に残るのは、やはり南部を中心になお後を絶たない黒人リンチへの怒りである。そのごく一部を紹介しておこう。

合衆国の黒人 (The Colored folks) は合衆国政府 (Uncle Sam) に対して激しく怒っている……彼らは民主党も共和党も信用しない。どちらも黒人の期待と好意を利用し裏切った。今彼らが欲しているのは人々をリンチし焼きこらすことに対する本当の積極的、絶対的行動である……わずかでもセンスのある黒人なら法律が暴徒の残虐行為から彼らを守ってくれないということ、そして嘘つきの新聞が黒人を攻撃者として描き出すということを知っている…… (“UNCLE SAM ANGERS COLORED FOLKS”, Aug. 23, 1919)。

……黒人は、すでに彼のものとなっていながら、しかも彼から奪われているもののために戦っている。彼は、暴徒の犯罪から仲間を守る法律を励行することを要求している。彼の嘆願は正当だろうか。あらゆるキリスト教道徳を邪悪にも奪っておきながら、この国をキリスト教国と呼ぶことができるのだろうか。ネロの時代とアメリカ民主主義の時代においてのみの、人間が人間を焼くという汚辱の記録を残しながら、しかもなおアメリカはその進んだ文明、その民主主義、そして世界を安全に住める場所にするというその使命を誇っているのである…… (“The Battle For Democracy is Here—Home”, June 14, 1919)

III

リンチの恐怖という点では黒人は日系人以上に不幸であった。しかしながらシアトルの黒人は、アメリカ市民として当然のことながら、投票という日

系人にはない武器を持っていた。当然彼らは、差別撤廃等々の目的のためにこの武器を有効に行使しようと努めた。『サーチライト』にも、当時のそのような彼らの政治活動を伝える記事が数多く掲載されている。

ワシントン州の黒人票を固めようとする動きが始まっている。D.T.カードウェル博士は州の各地の著名な黒人たちから誰にとっても利益となるであろうこのような運動についての通信を受け取っている。この大事な時期に、投票の力をもっとうまく利用するために全力を尽くすことは黒人の一員としての義務であり、その唯一の論理的手段は成果を挙げるためにはどのようなステップが最善であるかを理解することである。我々は心からこの運動を支持し、この構想を大きく評価する。我々はこの州の大いなる政治勢力であり、もし我々が一団となって投票所に赴けば、我々にふさわしい政治的認知を要求することができるであろう（“Editorials”, Sept. 20, 1919）。

当時の黒人は一般に共和党すなわちリンカーンの党の支持者であり、しかもワシントン州は伝統的に共和党が牛耳ってきた州である。したがってこの種の動きも共和党と連携することが多かったようである。カードウェルたちはまもなくワシントン州黒人共和党クラブ（Washington State Colored Republican Club）を結成した。この組織のその後の活動はほぼ1年後の『サーチライト』に次のように紹介されている。

ワシントン州黒人共和党クラブはワシントン州シアトルで1年前に結成され、その年に我が州の黒人有権者はかつてないほどに良く組織された。黒人有権者が少しでも存在する郡では郡クラブが組織された。黒人女性はいくつかの郡クラブで積極的に行動し、登録と投票に関心を示し、州の政治体の重要な原動力となった。郡クラブは州の各地で組織され、その会長たちはその郡クラブが彼らの郡において重要な役割を占めるように積極的に活動した。郡クラブおよびその会長は以下のとおりである。

.....

これらの郡クラブの他に、エレンスバーグ、ワラワラ、およびウィンロックで地区クラブが設立された。州クラブも活動を進めた。登録と投票を奨励し、組織化と共和党公

認候補への投票を促進する他にも、大事なことを成し遂げた。1920年4月27日にベリンガムで開かれた共和党州大会で、今ではワシントン州共和党の綱領となっている以下のような条項が成立したのは、このクラブの活動の結果であった。

「我々は人種、信条、色に関わりなく全市民の活動の政治的、産業的、経済的平等、および法廷におけるすべてのものの平等という共和党の政策を再確認するとともに、群衆による暴力を非難する。」

…… (Nov. 6, 1920)。

しかしこのような共和党への献身に疑問を感じる黒人も存在した。1920年12月9日の『サーチライト』でロバート・G. カントーンは、「古い共和党は死んだ」、黒人は今や自分自身の判断で投票すると宣言する。彼によれば、黒人共和党クラブは白人支配者たちの傀儡に過ぎなかった⁽⁹⁾。

ワシントン州においては黒人は共和黨員に何も負っていない。ワシントンは南北戦争のかなり後、1889年まで連邦に加入していなかった。当地の共和黨員は奴隷を解放するのに何ら貢献しなかった。……昨年若干の白人共和党政治家が黒人共和党クラブを組織した。なぜか。当地では全権力を青年共和党クラブ (Young Men's Republican Club) と中央委員会 (Central Committee) が握っているということは誰でも知っている。これらはまったく白人だけの組織 (lily white organizations) である。そこに黒人はいない。これらの白人共和黨員がこの黒人共和党クラブを組織したのである。それは単なるジム・クロウ政治団体 (a jim crow political organization) に過ぎない。なぜ黒人が南部に反対するのか。そこでは彼らはジム・クロウ車と呼ばれる分離された車両に乗らなければならないからだ。ここシアトルで彼らは白人共和黨員にごまかされてジム・クロウ政治団体を結成しているのだ。……共和党は州のすべての部局を支配している。州の部局で何らかの役職についている黒人男性あるいは女性が一人でもいるだろうか。州あるいは郡の官職に立候補している黒人男性あるいは女性が一人でもいるだろうか。共和党系政治団体で何らかの役職についている黒人男性あるいは女性が一人でもいるだろうか。郡のあらゆる役職は共和党によって握られているのに、その役職についている黒人男性あるいは女性が一人でもいるだろうか ("MORE TRUTH THAN FICTION", Oct. 9, 1920)。

IV

共和党への対応とならんで注目に値するのは、ゼネラル・ストライキ後の逆流を覆すべく1920年春のシアトル市長選挙に出馬した中央労働評議会書記、ジェームズ・ダンカンに対する『サーチライト』の反応である⁽¹⁰⁾。

あらゆる徴候に照らしてジェームズ・ダンカンは火曜日の選挙で黒人票を受け取るであろう。彼らは、市長に立候補している人々の記録を調査した結果、彼が人類の寄生者たちの眼から見て許しがたい罪を犯しているということ、そしてそれは彼がもっとも下積みの人々の友人であるということ、そして彼の唯一の欠陥は彼が労働者階級の出身であるということを確認するようになった。黒人は100パーセント労働者なのであるから、彼らの利害は政治的デマゴグの手によってよりも彼の手によって良く守られることであろう (“Editorials”, Feb. 14, 1920)。

この市長選挙は3人の候補者の戦いであった。ダンカン、コールドウェル、そしてフィッツジェラルドである。アメリカニズムを選挙戦のスローガンとしたフィッツジェラルドは、トリプル・アライアンスの候補者として出馬したダンカンを真っ向から攻撃し、コールドウェルは保守ながらやや中道的な路線をとっていた⁽¹¹⁾。

火曜日の予備選挙において黒人たちが『サーチライト』の指示どおりにダンカンに投票したかどうかはもちろん不明である。ともあれ選挙結果は、1位コールドウェル、2位ダンカン、そして2人の票差は約2,000票であった。当時のシアトルの3大紙、『シアトル・ポスト・インテリジェンサー (P.I.)』、『シアトル・タイムズ』、および『シアトル・スター』の支持を受けてもっとも有力と見られていたフィッツジェラルドは、意外に振るわずに選挙戦から脱落した。21日の『サーチライト』は次のようにフィッツジェラルドを支持した3紙を皮肉っている。

ジェームズ・ダンカンの反対者たちは想像できるかぎりではもっともユニークな状況に直面している。強力な集票力を持っているかにみえる P.L., タイムズそしてスターの連合はその名声をフィッツジェラルドに賭けた。そして彼は引き離された3位に終わったのである。…… (“Editorials”, Feb. 21, 1920)

かくして本選挙はダンカンとコールドウェルの二人で争われることとなった。本選挙を前にした28日、『サーチライト』は再度黒人有権者へダンカンへの投票を訴えている。

火曜日に我々はジェームズ・ダンカンに投票するであろう。なぜなら彼はもっとも多数のもっとも善良なる人々を代表をしているというのが我々の率直な意見だからである。この結論を引き出すにあたっての論点は明らかである。彼は働く人々を代表する候補者であり、彼は働く大衆にとってもっとも重要な理想を擁護しており、彼自身が労働者である。以上の理由によって彼の当選は白人労働者の85パーセント、我が人種の労働者の100パーセントにとって利益となるであろう。……世界は変化しており、シアトルの人々も変化している。必要なのは実行する男たち、伝統的なルールによって手や足を縛られることなく皆にとって良いことを推進するために仲間と手をつなぐ意志のある男たちである。我々はジェームズ・ダンカンはそのような人物であると信じており、彼は火曜日に我々の票を受け取るであろう (“Editorials”, Feb. 28, 1920)。

しかしながらフィッツジェラルド陣営はその力を今度はコールドウェル支援に振り向けた。ダンカンが「ソヴィエト型政府」や女性の国有化を意図しているといったデマが流布された。結局のところダンカンは17,000票差で敗れ、コールドウェルが市長に当選したのである。『サーチライト』は次のようにこの敗北を受けとめた。

我々は破れた、しかしこれは不名誉なことではないし、我々が投票した人物が「もっとも多数のもっとも善良なる人々を代表する」人物であろうという確信には変わりがない。34,000票（ダンカンの得票）とはたいした見物ではないか…… (“Editorials”,

March 6, 1920)』

このような『サーチライト』のダンカンへの支持は、労働運動と黒人との過去の関係がけっして良好なものではなかつただけに、一層注目に値する。冒頭で紹介した1913年5月の『ユニオン・レコード』の記事は、労働運動は黒人を差別していないと主張していた。しかし実際には、ここシアトルにおいてさえ、多くの組合が黒人の加入を拒んでいたのである。

したがって黒人労働者が、生活のためにあえてスト破りとして行動したとしてもまったく不思議ではなかつた。1916年7月22日の『ユニオン・レコード』は次のような記事を掲載している。

日本人労働組合は、事務局長 T.K. ササキの署名で、中央労働評議会に対して、その組合員は現在の紛争に介入しないように警告されており、非常に魅力的な条件を提供されているけれどスト破りにはならないであろうと通告してきた。良くやった、日本人たちよ。この行動は港湾労働者組合が差別していないのに、群をなしてスト破りとなった一部の黒人たちの行動とは対照的に賞賛に値する。波止場における暴力のほとんどは、働くためではなく戦うためにそこにいる低級な黒人たちの存在によって引き起こされた。そして彼らは、働くことにたいしてよりも戦うことにたいして、より多くの報酬を受け取っているとされている⁽¹²⁾。

1913年に黒人に対してともに日系人を排斥しようと呼びかけた『ユニオン・レコード』が、1916年には、日本人を賞賛し黒人をスト破りとして非難しているのである。

とはいえ、黒人に門戸を開放する組合が次第に増えていったことも確かである。1920年5月26日の『ユニオン・レコード』は次のような事実を伝えている。

オレゴンとワシントンの機械工はタコマの大会においてカラー・ラインを撤廃すると

いう重要な一步を踏み出した。

今後すべての非白人（黒人、日本人、フィリピン人その他）は白人と同じ立場で加入を認められる。これはあらゆる労働団体のルールになりそうである。

すべての労働者の経済的利益は一つであり、そのかなりの部分、たとえば非白人が排除されている時には労働者は不利な立場に置かれるということは、しばらく前から明らかになってきた。産業の発展にとって非常に重要な労働者の連帯は人種、色、性別を完全に無視することなしには達成できない。

カラー・ラインの撤廃は労働運動の理想を達成するための勝利への重要な一步となるであろう。

アメリカのみならずヨーロッパにおいても経済的な相違は人種の相違よりもより深いということが示されつつある⁽¹³⁾。

『サーチライト』はこの決定を歓迎し、この論説の全文をその5月29号に転載した⁽¹⁴⁾。

もう一点つけ加えておこう。本選挙直前の1920年2月28日に『サーチライト』は、「この人々はすべての男女の宗教的・政治的自由の憲法による保障を支持している」、「人民の人民による市政」、「彼らに投票しよう」などの推薦文とともに、ダンカンをはじめとする5人のトリプル・アライアンス推薦の市長、市議会議員候補者の写真を掲載した。この写真について、当時シアトル労働運動の内部に潜入していた労働スパイの報告がワシントン大学の資料館に残っている。それによると、ブラッドレイという活動家はその労働スパイに、もちろん彼がスパイとは知らずに、次のように語っている。

シアトルの黒人たちはダンカンを固く支持している。週刊サーチライトの代表がトリプル・アライアンスの全候補者のカットを取りに事務所にやってきて、そしてサーチライトの最新号に候補者の写真を載せたんだ。もう一つ面白いのは、日本人の代表たちが事務所へやってきて、選挙資金として125ドルくれて、彼らの支持を約束したってことだ。我々はどちらのグループに対しても支持を訴えたりはしなかった。しかし彼らは、ダンカンならコールドウェルがやろうとしない公平な処遇を彼らに与えるだろう、とい

うことを知っているんだ⁽¹⁵⁾。

V

1919年—1920年というのは、シアトルあるいはワシントン州の排日運動が一つの頂点に達した時期である。したがって『サーチライト』の1年半の記事の中にも、かなりの数の日系人問題に関わる記事が含まれている。そしてその多くは、同じ非抑圧者として日系人に共感を寄せ、日系人排斥に真っ向から反対する立場に立って書かれているのである。

まず、もっとも明確に日系人を擁護した論説を紹介しよう。

日本人に反対するものは黒人に反対するものである

黒人有権者は今年政治に関心を抱いている。

古い連中には投票するまい。選択しよう。

今年の夏の日本人に対する非難の合唱に加わったすべての候補者は、市、郡および州のすべての黒人票を失うと言っても差し支えないであろう。黒人有権者は、群衆を喜ばせるために日本人に吠えさせている政治家たちは、同じように黒人市民にも吠えさせてようになるであろうということに気がつき始めている。数年前に議会で反日本人法が審議されていた時にある候補者が次のように言った、「俺がねらっているのはクロンボ（nigger）だ。彼こそ俺が叩きたい相手だ。」その同じ人物が共和党員として、オリンピック（ワシントン州首都）に戻るために黒人票をせがんでいるのだ。このような連中を全員見つけだそう。彼らにあなたの票を取られるな。日本人についてわめいているすべての人間を警戒せよ。同じ人間があなたにも毒なのだ（“HE WHO IS AGAINST JAPS IS AGAINST NEGROES”, Sept. 4, 1920）。

タコマ版『サーチライト』の次の記事も選挙に関連している。6人の反黒人的な候補者の名前を挙げ、彼らには投票するなと黒人有権者に忠告しているのである。

黒人有権者のためのサーチライト

男女ともこれらの人間に投票するな

ルイ・F・ハート—彼の政権には黒人の場所はない。日本人に反対、あなたにも反対。
アルバート・ジョンソン—南部気質。日本人に反対、あなたにも反対。ジョンソンは人間としては良い男だが、政治的には適切ではない。

ジェームズ・H・デイヴィス—「クロンボ (Nigger) はどうしても好きになれない。」
フォーゼット・ロングマイヤー—「黒人嫌い。」相婚禁止法の起草者で黒人のひどい敵。
ゲオ・P・ランピン—彼のことは忘れてしまいたい。彼が以前官職についていた時には黒人に仕事を与えなかった。(“THE SEARCHLIGHT TO THE COLORED VOTERS, MALE AND FEMALE—DON’T VOTE FOR THESE MEN”, Sept. 11, 1920)

すなわち最初の二人に関しては彼らが反日系人的であることが投票してはいけない理由の一部なのである。

白人と黒人にのみ帰化の権利を認めた米国法によって、当時の日系移民には将来とも投票権獲得の展望がなかった。それゆえ、黒人と日系人の利害を同一視することによって『サーチライト』は、日系人自体には不可能な手段で、排日運動と戦っていたと言ってもさしつかえないのである。

もちろん、これほど明確に黒人と日本人の利害を同一視した記事は多くはない。しかしながら、他の問題を主題とする、すなわち政治家を批判したり、白人を皮肉ったり、あるいは黒人に一層の自覚を促す記事の中で、日本人に言及したものは多く、その大半は日本人に好意的である。そのいくつかを紹介しておこう。

反日本人連盟 (the Anti-Japanese League) の書記であるフランク・F・カネアは、すべての赤い血を持ったアメリカ人に対して日本人の前進を阻もうとする彼の努力を支援するよう求めている。我々の理解するところでは、彼はシアトル市民に3年間市議会議員に選んでくれるように求めていたあのカネアである。……我々は彼が、アメリカと日本とを対立させ外国貿易を支配しようとするこの国で莫大な金をばらまいているイギリス政府に雇われているということ、少しも疑わない⁽¹⁶⁾。(“Editorials”, May 1, 1920).

インディアンたちが自分の土地に侵入してくるアングロ・サクソン人を見た時、現在日本人の侵入について青白い顔の兄弟たちが騒ぎを引き起こしているように、インディアンのアジテーターによって大騒ぎが引き起こされたであろうことを、我々はいささかも疑わない。白人は彼らの先進文明のいつものやり方で赤色人の無知につけ込み赤い兄弟たちを絶滅した。今や運命は白人の兄弟たちの番になり、彼は門の下の豚のように悲鳴を上げている。……白い兄弟はこの世界は白人の世界である、他の連中は働かなければならない、彼はその利益を手に入れるという信念に迷わされていた。日本人が彼らをその幻想から覚まし、彼は「人は額に汗して自らのパンを稼がなければならない」ということを発見したのである（“Editorials”, July 17, 1920）。

日本人移民にめぐってカリフォルニアで開かれた公聴会において、ある日本人はアメリカの議員と傍聴者に「日本人はだれとでも結婚する資格がある」と述べた。彼は南カリフォルニアの偉大な日本人じゃがいも王、シマである。黒人が卑下して頭を地面にこすりつけている間に、日本人は尊敬されるようになるであろう。なぜか？彼らは男だからだ。彼らはどんな人種に対しても卑下したりしない。他方、合衆国の至るところに、黒人でありながら自分自身の人種に対してカラー・ラインを引いている惨めな連中がいる。ビジネスその他どこにおいても、自分自身の人種にカラー・ラインを引くすべての黒人は我が人種によるいかなる認知も拒否されるべきである（“JAPS DECLARE THEY ARE GOOD ENOUGH TO MARRY WHITE WOMAN”, July 31, 1920）⁽¹⁷⁾。

先週の『スター』によると、港湾委員に再選をねらっている候補者であるリッピーは「黒人は日本人以上に我が国の脅威である」と述べたということである。また後のインタビューでリッピー氏は、この記事が正確であると認めるとともに、黒人を混乱させるつもりはなく、これは論点を明らかにするために用いたのであると言明した。我々は与えられた説明を受け入れざるを得ないが、3つの可能な結論があり、そのいずれをとっても彼は港湾委員という重要な地位につくにはふさわしくないように思われる。第一はリッピー氏は愚かであり、軽率に発言し行動したということ、第二に彼は偏見の持ち主であり、公正不偏な行動を取ることができないということ、あるいは彼は黒人と日本人双方の特質と業績について恐ろしく無知であるということである。いずれの人種にせよ一体どういう理由で脅威とみなされねばならないのであろうか。そもそも脅威とは何な

のだろうか。もしも凶暴な迫害と厳しい障害の中で人種のプライドを守ろうと努力し、そして成果を挙げたことが、もしもこれらのことが脅威であるのなら、我々はそれを誇り、そのように思われることを価値のある貴重なこととみなすべきであろう（"Editorials", Dec. 4, 1920）。

最後に、フィリップ・ティンダルの提案に反対するマックスウェル博士の投書を紹介しておきたい。ティンダルは当時のシアトルにおける排日運動の中心人物であり、彼らによって提案され制定される排日のための諸条例が、日系人社会の深刻な悩みの種となっていたからである。この投書は一面に大きく掲載されており、『サーチライト』編集部の意向をも反映したものであろう⁽¹⁸⁾。

編集者へ：ティンダルの条例について注意すべき点として一言。貴紙は問題の条例が特に白人の契約者を求めているという事実を見過ごしたかも知れない。

成人のアメリカ生まれ（投票する）日本人と6,000人の当市の黒人には、「勝ち目」がなくなっているのである。かくしてティンダルの法案は、アメリカ市民の2階級を差別し3分の1を優遇するものとなっている……

……しかししたしかにティンダル氏をへこますための何らかの圧力が必要である（"DOCTOR C. F. MAXWELL, WARNS", Aug. 21, 1920）。

以上、当時のシアトルの、あるいは合衆国全土における排日の嵐の中で『サーチライト』がほぼ一貫して日系人に好意的であり、自らも差別に悩む中で黒人と日系人との連帯を模索していたということを明らかにできたと思う。

今日、昨年のロサンゼルス暴動に端的に示されたように、合衆国の人種問題が複雑化し、かつてのような白人・少数人種の対立に加えて黒人とアジア系との対立も深刻化している。それだけに、この20世紀初頭のシアトルのささやかな黒人週刊紙の言論活動は、合衆国における黒人・日系人（あるいは

アジア人) 交流史の一エピソードとして記憶されるに十分な価値を持っているのではあるまいか。

注

- (1) 以上、拙稿「第一次大戦前のシアトル労働運動と日系人問題」(『岡山大学経済学会雑誌』第23巻第4号, 1992年)を参照されたい。
- (2) 1983年2月に目録番号A7228としてマイクロフィルム化されている。ただし, July 12, 1919, November 22, 1919, May 22, 1920, September 25, 1920, December 11, 1920の各号はmissing issuesである。また, 巻について混乱がある。1919年の9月27日号からVol. 17に戻り, 1920年になってしばらくVol. 18が続き, そして1920年の途中でVol. 19になっている。
- (3) 本稿の課題は限定されたものだがより包括的に黒人新聞の日系人への対応を検討したものとして, Shankman, Arnold, ““Asiatic Ogre” or “Desirable Citizen”? : The Image of Japanese Americans in the Afro-American Press, 1867-1933”, *Pacific Historical Review*, 46-4, 1977, David J. Hellwig, “Afro-American Reactions to the Japanese and the Anti-Japanese Movement, 1906-1924”, *Phylon*, 38-1, 1977, がある。
- (4) シアトルでもまたこの時期に黒人差別は強化されたようである。バーナーは「黒人に対するより公然たる形態の差別は第一次大戦期に出現し始めた。彼らはカフェ, 劇場その他の公共の場所でのサービスを拒否された」(Richard C. Berner, *Seattle 1900-1920: From Boomtown, Urban Turbulence, to Restoration*, Charles Press, Seattle, Washington, 1991, p. 74)と述べている。
- (5) たとえば, “The Battle For Democracy is Here—Home”, June 14, 1919, “MAKE AMERICA SAFE FOR AMERICANS”, June 21, 1919, “Send the Former German Kaiser to America and Have Him Classified as an American Negro”, June 7, 1919, “ADDRESS TO THE NATION”, Aug. 9, 1919, “UNCLE SAM ANGERS COLORED FOLKS”, Aug. 23, 1919.
- (6) たとえば, “COLORED SOLDIER COMPLAINS OF BAD TREATMENT”, Aug. 2, 1919.
- (7) たとえば, “Editorials”, Feb. 14, 1920.
- (8) たとえば, “FRANCE WELCOMES COLORED LABOR”, Aug. 16, 1919, “FRENCH AND GERMANS BOTH LAUD THE DEPARTING BLACK SENEGALESE”, Sept. 4, 1920.
- (9) “Tacoma Negro Politics—The Policy of Tacoma Searchlight”, March 6, 1920 や “POLITICS IN WASHINGTON”, May 8, 1920 も同じような視点から黒人共和党クラブの意義に疑問を投げかけている。前者は, 「我々は奴隷のように共和党白人候補のために働き続けてきたが, 彼らは我々を嘲笑しただけであった」と述べている。他方,

- “Wash. State Colored Republican Club, say’s”, Oct. 30, 1920 はタイトルどおり黒人共和党クラブの主張をそのまま掲載している。また, “Editorials”, Oct. 2, 1920, “Editorials”, Oct. 30, 1920, “Editorials”, Nov. 30, 1920 も黒人は共和党を支持すべきであるとの立場に立っているように思われる。
- (10) この選挙へのダンカンの出馬の意義, トリプル・アライアンスなどについて詳しくは拙稿, 「シアトル・ゼネラル・ストライキと日系人労働者Ⅱ」(『岡山大学経済学会雑誌』, 第22巻第1号, 1990年, 86-87頁を参照されたい。
- (11) 以下この選挙については, Mary Joan O’Connell, “The Seattle Union Record, 1918-1928: A Pioneer Labor Daily”, M. A., University of Washington, 1964, pp. 155-157, Berner, *op. cit.*, p. 313.
- (12) *Seattle Union Record*, July 22, 1916. なお, バーナーはこのストライキと黒人との関係について次のように述べている。「国際港湾労働者組合はまったく黒人を閉め出していた。この差別は裏目にでた。その結果黒人は1916年の港湾労働者の悲惨なストライキの時にスト破りとして雇われたのである」(Berner, *op. cit.*, p. 75)。「T. K. ササキ」は佐々木勝成であろう。
- (13) *Seattle Union Record*, May 26, 1920. なお1919年には, ゼネラル・ストライキ後の昂揚した気分の中で, シアトル中央労働評議会は黒人, 東洋人労働者との連帯を確認し, 「すべての障壁を撤廃し必要な処置をとるよう全ローカル・ユニオンに勧告」している。“From Strike Committee resolutions urging formation of a pact with colored and Oriental labor. Ref’d to Resolution Committee.” (Minutes of the Central Labor Council of Seattle and Vicinity, Central Labor Council, King County Papers, Manuscript Collection of The University of Washington, Box 15, Feb. 26, 1919), “RESOLUTIONS COMMITTEE reporting upon resolution seeking to remove barriers to colored persons entering our unions, recommends that all local unions be urged to take such steps as are necessary to have all barriers removed which prevent the same freedom for white or colored persons joining their unions. Concurred in.” (ibid., Apr. 9, 1919.) Cf. Berner, *op. cit.*, p. 298.
- (14) *Searchlight*, May 29, 1920.
- (15) Beck Broussais C. Papers (Manuscript Collection of The University of Washington), report of Agent 106, March 1, 1920. なお, 5人のうちの1人であるレインの落選は, シアトルの日系人にとってダンカンの落選以上に打撃となったと思われる。『スター』の強力な支持を受けてレインを破ったのが, シアトル排日運動の中心人物, フィリップ・ティンダルだったからである。Cf. O’Connell, *op. cit.*, p. 157.
- (16) 『サーチライト』は日系人排斥と日米対立の背後にイギリスの陰謀を見ていたようである。他にもそのような論説(タコマ版編集者 Gustave B. Aldrich による)がある。Cf. “IS ENGLAND USING THE JAPANESE QUESTION TO MAKE A CATS-PAW OF THE U. S.?”, Oct. 9, 1920.
- (17) 『サーチライト』には他の被抑圧人種の経験を例に出して黒人の自覚と努力を促す記事がいくつか掲載されている。これもその一つである。たとえばユダヤ人を例に引いた

記事として、“A LESSON FROM THE JEWISH RACE”, July 19, 1919 がある。なお、当時は異人種間結婚への白人の反発が強く、ワシントン州議会でも1917年に、「白人と黒人、中国人、および日本人の間の結婚を禁止し、その違反を罰する」条例が提案されている。人種差別の最たるものであるこのような動きに黒人たちはもちろん強く反発した (cf., “DR. T. D. CARDWELL NAILS A LIE-TO THE COLORED VOTERS OF THE STATE OF WASHINGTON”, Sept. 11, 1920)。それだけにジョージ・シマ (牛島謹爾は日系人社会の外ではジョージ・シマとして知られていたようである) の証言に『サーチライト』の編集者は敬意を払い、黒人に自覚と誇りを持たせるための材料としてこれを紹介したのであろう。(Cf. U. S. House of Representatives (Sixty-Sixth Congress, Second Session), The Committee on Immigration and Naturalization, *Japanese Immigration Hearings*, Part 4, Washington, D. C., 1921 (Arno Press. ed., 1978), pp. 65-66)

- (18) このマックスウェル博士は、この直前にシアトルで開かれた合衆国下院移民・帰化問題委員会の公聴会にも、書簡を送って特に発言を求め日系人のために弁じている。博士によると、公聴会における衛生局代表の発言は日本人が非衛生的な民族であるかのような印象を与えた、しかしながらシアトルのジャクソン街で白人たちが経営している鶏肉マーケットはきわめて非衛生的である、博士の知っているかぎりいかなる日本人もそのような非衛生的なやり方で食品を販売してはいない (U. S. House of Representatives (Sixty-Sixth Congress, Second Session), The Committee on Immigration and Naturalization, *Japanese Immigration Hearings*, Part 4, Washington, D. C., 1921 (Arno Press. ed., 1978), p. 1409-1410)。なお、“BENEFITS OF JAPANESE COLONIZATION” Apr. 17, 1920 は日本人経営の商店は白人経営の商店より安い、彼らの商店をもっと利用しようと呼びかけている。